



作品「HINANINGYO MH1-01」(手前)ほか

鋭角的な角処理と曲線が織りなすデザインが美しい雛人形、直線と曲線の組み合わせが美しい五月人形。いずれも飾りをそぎ落とし、端正なデザイン。そして繊細な直線美にあふれた椅子たち。モダンアートの継承者を思わせる作品は今、新たな活動の地・東川から、新しい命を吹き込まれて次々と誕生しています。この地で産声を上げる作品こそは、大雪の山々が育む新たな息吹の作品となるに違いありません。



直線を生かした端正なデザイン感覚の作品、いや製品の数々。これがヨーロッパ・イタリアで鍛えられたデザイン感性なのかもしれません。

「日本では、エッジやコーナーをつい丸くするが、イタリアではむやみに丸めないんです。専門学校の卒業試験の時、先生が『最後の面取りに注意して仕上げろよ』と耳打ちしてくれたことが、今も自分の中で基本になっています。

そしてそのくらい繊細さにこだわると、だから彫刻にしても建築にしてもシャープに見えるんです。日本人はその辺が意外とアバウトですね」。

幼少期から自宅で父親のアトリエにあった粘土を遊び道具にして育ったそうです。

「父はどちらかというとモダンデザインを志向していて、若いころニューヨークに行っていたそうです。東京駒込の自宅もすぐくモダンな家でした。自分はそれを引き継いでいると感じます」。

そのためか、作品は芸術性の高いデザイン性豊かなものばかり。そして繊細なデザインは、特に数

多い椅子作品に生きているようです。

北海道に移住するきっかけは、彫刻家、故砂澤ヒツキ氏の妻、砂澤涼子さん(現在札幌市内在住)からの紹介でした。

「専門学校を卒業後、イタリアで就職したんです。でもバブル崩壊で1年間で帰国を余儀なくされて…。東京に戻ってみると、なぜか気持ちが落ち込んでいた。川空港経由で初めて音威子府を下見に行き、途端に落ち込んでいた気持ちが楽になった。4月初めでしたが、雪も残っていて、小さな盆地みたいな風景に感動しました。ずっとイタリアの環境に馴染んでいたせいか、考えてみると、東京に戻って逆カルチャーショックに襲われたんですね」。

半信半疑で訪れた地は、すぐに「居てもおもしろそうだな」という気持ちになったといいます。

3年前、偶然に見つけたのが、この旧家具製作工房。新たな地で意欲的作品を発表しています。

作品「KINTARO MK1-03」



作品「KABUTO MKA-02」の製作



作品「KOINOBORI MK00-01」



「THE MODERN STYLE」基恆良 創作家具と人形展(1月27日～2月2日、くまもと阪神6階美術画廊)の会場

もとい つねよし  
基 恆良さん 家具・デザイン・製作「T.MOTOI」/30区 ☎82-2027  
東京都出身。45歳。東京都立工業高校(室内工芸科)卒。イタリア・カントゥー市立工業専門学校卒(1993(平成5)年)。カントゥー市プレゼビオコンクール優勝(1990(同2)年)。94年、日本に帰国後、上川管内音威子府村の木工工芸センター(山村教育交流センター)指導員(13年間)。3年前、東川町内でたまたま空き家になっていた旧家具製作工房を見つけ、移住独立。  
父親は奄美大島出身の彫刻家、故基俊太郎氏=2005(平成17)年、81歳で死去=。碌山美術館(長野県安曇野市穂高)の第一、第二展示棟の設計者。彫刻家、故中原悌二郎とともに、彫刻家・洋画家、故石井鶴三(東京芸術大名誉教授)の石井教室で学びました。米国ハーバード大などでも活動。